

# 報告Ⅲ：19世紀末オランダ領東インドに おけるカルティニの思想 ——近代化の視点から考える——

ミヤ・ドゥイ・ロスティカ

## 目 次

1. オランダ領東インドと近代化
2. オランダ植民地政策の変更とカルティニの登場
3. カルティニの思想とその近代性
4. 終りに

### 1. オランダ領東インドと近代化

19世紀のオランダ領東インド（現代インドネシア共和国）はオランダによる過酷な植民地支配の下にあった。オランダによる植民地支配の特徴は（1）オランダ領東インド全域で民族ごとで異なる言語・文化・慣習の固定化による分割統治制度の採用（2）被支配者である「原住民」に対する愚民化政策（学校教育の禁止等）（3）強制栽培制度による過酷な支配と重税（4）3人以上の集会の禁止を始めとした自由の制限等を中心とした厳しい人種差別的な性格をもつものであった。

このようなオランダ領東インドの社会は厳しい植民地政策によって自発的な歴史の発展は望めず、そのため基本的には古代からの伝統社会体制を維持し続けることとなった。唯一の社会変化は、オランダの植民利益を拡大するために行われた道路の整備や港湾の整備によるものであり、そして支配者であるオランダ人が快適な居住をするための都市環境やリゾート地の整備によるもののみであった。植民地経営がオランダ本国政府による直接支配となった19世紀になるとオランダからの一般移住者が急激に増加するようになり、植民地支配は

東インド全域に及ぶようになる。とくにその重要な転機となったのが 1869 年のスエズ運河の開通である。その結果、オランダ領東インドにやって来る西欧人が急激に増加し、各植民地都市には新しい石造りのコロニアルスタイルの近代的建物が立ち並びカフェ、映画館、テニスコートといった西洋の風景が新しい時代の到来を強くイメージさせるようになる。しかし、これは「原住民」社会とは全く切り離された壁の外の植民地都市特有の近代の風景であった。

一般に社会の近代化というのは 18 世紀後半に始まったイギリスの産業革命によって起きた社会の産業化（工業化）あるいは国民国家の形成を特徴とする社会的、歴史的変化のことであるとされる。近代化という用語を国民国家の形成と関係していると思われる事項を思いつくままに述べると次のようなものがあげられる。

- (1) 個人主義 (2) 自由主義 (3) 民主主義 (4) 合理主義 (5) 国民主権 (6) 法治主義 (7) 多数決 (8) 男女平等 (9) 国民教育 (10) 女子教育 (11) 表現の自由 (12) 信仰の自由 (13) 教育の自由 (14) 集会・結社の自由等

ここに並べたもの以外にも経済分野では社会福祉や所得水準の向上、平等の実現などもっと数多くあげられる。私がここで指摘したいことは、19 世紀末のオランダ領東インドの「原住民」社会では上にあげた項目の全ては全く関係のない存在であった。オランダ植民地政庁による愚民化政策によって原住民には教育を行われず、何百年も古代と変わらない伝統社会の中に閉じ込められたのである。「原住民」にとって自由や平等あるいは民主主義という用語は聞いたこともない無関係な存在であった。封建的慣習やイスラム教の教えによって男尊女卑の中に縛られていた女性たちにとっては、20 世紀の初頭になってもまだ「暗黒の世界」は続いていたのである。この暗黒の世界に一筋の西洋近代思想の光明がひとりの原住民の少女に射し込む。その少女カルティニこそがインドネシアにおいて最初の「近代化」という歴史的な大問題に正面から取り組み、その意味を理解しようとした最初の存在となる。

## 2. オランダ植民地政策の変更とカルティニの登場

1830年に始まるオランダによるジャワでの強制栽培制度の導入はその過酷さのためジャワの農民を悲惨な状況に追いやった。「原住民」を人間として扱わないオランダ植民地政庁の利益中心主義政策に対しては19世紀の後半には国際的に批難が高まっていく。それに伴ってオランダ国内からも新しく登場してきた自由主義思想の立場からオランダ植民地政庁の人権無視の政策に対して強い批判がでるようになる。そのため、20世紀に入ると倫理主義政策と呼ばれる植民地主義に転換が図られる。しかし、それは倫理政策という名前でも分かる通り批判が強まったので、ほんの気持ちだけ譲歩するという程度のものであった。それにもかかわらず結果として、その中に、植民地経営を強化するためではあったが、一部の原住民に対して教育の道が開かれることになる。それがジャワの近代化の始まりとなる。そして、教育の結果、極一部の者であったが、字を読めるようになった原住民に芽生えたものはオランダの判断とは全く異なった近代的民族意識の覚醒であった。

とくに、ひとりの原住民の少女であるカルティニはオランダ語を通して、当時ヨーロッパで流行し始めていた近代自由主義思想に夢中になった。オランダ領東インドが大きな転換期を迎えていた時代の1879年4月21日、カルティニはジャワの貴族階級（プリヤイ-Priyayi）の家庭に生まれる。カルティニが1885年6歳の時に彼女は中部ジャワ北部海岸に面積する港町ジュバラ（Jepara）にあったヨーロッパ人小学校<sup>(1)</sup>でオランダ人生徒と一緒にオランダ語による教育を受けるようになる。19世紀末のオランダ領東インドでは、教育はオランダ人生徒のみを重視していた。プリブミ（原住民）に対する教育は、オランダ政庁の役人を育成するための学校や原住民の貴族階級であるプリヤイの子供を中心に極少数の者に限られていた。カルティニの父はジェバラの知事であり、プリヤイであったため、カルティニは特別にオランダ人学校に入学することを認められた。この時代プリヤイの慣習（Adat-アダット）では女子を家の外へ出すことを固く禁じており、男子生徒たちと接触することなど論外であった<sup>(2)</sup>。

カルティニの小学校時代の成績は先生も驚く程優秀であり、卒業時にはオランダ語のかなり難しい本を読むこともできるようになっていたと言われる。

カルティニは 12 歳になると当時ジャワにおいてジャワ貴族階級の娘の慣習であった「ピンギタン-Pingitan」,（婚前閉居, 以下ピンギタンと称する）の生活に入らなければならないため、学校を退学させられた。ピンギタンとは、初潮を迎えたブリヤイの女性が正式に結婚の申し出がくるまで、結婚に向けての花嫁修業を行う時期のことであり、女性は家の外に出ることが禁じられていた。ヨーロッパ人学校に通ったことによって「西洋」の自由な世界の事情などを知るようになったカルティニはジャワの慣習である「ピンギタン」によって外の世界から完全に切り離された。この不自由な生活を送る中でカルティニは次第にジャワの伝統な制度に対して批判的な考えをもつようになった。他方で、カルティニはこの時期に様々なオランダ語の新しい思想の雑誌、新聞や本を読みあさり、さらにカルティニの能力を高く評価する倫理派のオランダ人たちとの文通を通じて自らの思想を深めていくのである。

### 3. カルティニの思想とその近代性

カルティニが 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて送った西洋人との文通の手紙の内容は、その思想の面で大きく 5 項目に分類できる。それはどれも新しい西洋思想に大きな影響を受けたインドネシアで最初の近代思想に対する反応の表現であり、その内容はインドネシアの近代民族意識の覚醒といえるものであった。以下その 5 項目について簡単に説明する。

#### (1) 宗教（イスラム）観

カルティニは、誰もコーランを文字で読めず、その内容も理解できないままで行われるイスラム教の形式的な信仰の在り方に対して厳しく批判する<sup>(3)</sup>。

## (2) 祖国（ジャワ社会）観

カルティニは自由と平等という西欧近代思想の立場から身分制や古い因習によって成り立っているジャワの伝統社会の制度に対して強く批判する。またジャワ人が男女とも運命主義で自分の意見を明確にしないことがジャワ社会を何百年間も停滞させてきた原因であるとして強く否定した。

## (3) 結婚観

ジャワの伝統的価値観やイスラム教では、女性の地位は低く、一夫多妻のように男性の所有物として扱われることにカルティニは厳しい批判を行った。彼女は男女平等に基づいた一夫一妻制こそが当然であると考えた。そのため、カルティニは現在ではインドネシアにおける婦人解放の先駆者として評価されている。

## (4) 女子教育観

カルティニは男女平等を実現するためには、女性にも男性と同等の教育が必要であると主張し、自らインドネシアで最初の女学校の設立を行った。

## (5) 西洋観

カルティニは、オランダ語の書物を通して西洋の新しい自由主義、社会主義という近代思想に触れ、それに大きな影響を受けた最初の原住民のひとりであった。しかし、カルティニはそのような進んだ西洋の近代思想にもかかわらず西欧の人は、アジアの「原住民」を人間以下の未開人として見下していると厳しく批判を行っている。カルティニのオランダ植民地政庁に対する強い批判はオランダも危機観を抱いた程であった。

## 4. 終りに

私が第一章の中で、国民国家の形成と関連した近代化の用語として並べた(1) 個人主義 (2) 自由主義 (3) 民主主義・・・(14) 集会・結社の自由といった事項のほぼ全てはカルティニの手紙の中に見いだせる。この点でもカルティニは正にインドネシアで最初に西洋近代思想と向き合った人物であったと言える。

そして、その理想についての理解力は非常に高いレベルにあった。そのため、カルティニはジャワの伝統的な慣習や迷信、イスラムの反近代的性格を激しく批判することとなった。しかし、カルティニは決してジャワの伝統の全てを否定してはなかった。彼女は自分の祖国であるジャワのバティックを始めとした工芸品やガムラン音楽や舞踊といった伝統芸能に対して強い誇りと愛着を持ち続けていたのである。

一方で、カルティニは西洋近代の新しい自由主義思想に沿って西洋の帝国主義的拡張、植民地主義あるいは人種差別主義に対して真正面から批判を展開した。倫理主義者で、カルティニを応援していたオランダ植民地政庁の幹部達は植民地体制を維持するためにカルティニのこの厳しいオランダ批判に対して危険性を感じるようになる。

このようなカルティニの思想は正にインドネシアの民族意識の覚醒に言えるものであった。カルティニの民族意識の覚醒はカルティニの死後ブディ・ウトモ (Budi Utomo)<sup>(4)</sup>と呼ばれる知識人のグループに受継がれてインドネシアの独立に向けた大きなうねりとなっていく。カルティニが目指そうとしていたのは「原住民」の民族の覚醒であり、植民地からの独立であった。このようなインドネシアの近代への道は想像を越える早さで達成されることになる。そして21世紀に入った現在もインドネシアの近代化の闘いは続いているのである。

## 注

- (1) カルティニが通っていたオランダ人学校は、その生徒の大半がインド階層 (Indo-混血) の子供たちであり、生粋のオランダ人は極めて少なかった。カルティニの通った学校が ELS のどのレベルについては、不明であるが、その学校が小さな町のジェバラにあり、生徒のほとんどが混血のインド階層のオランダ人であることなどから推測するに、「下流ヨーロッパ小学校」(Tweede Europese Lagere School)ではないかと思われる。1899年5月25日ステラ・ゼーハンデラール宛のカルティニの手紙。Kartini (Sulatin Sutrisno 訳)，“Surat-Surat Kartini” (カルティニの手紙集)，*Penerbit Djambatan*, 1981, p. 30 参照。
- (2) 1900年1月12日，ステラ・ゼーハンデラール宛のカルティニの手紙。Kartini, (Sulatin Sutrisno 訳) “Surat-Surat Kartini: Renungan tentang dan untuk Bangsaanya”

(カルティニの手紙：彼女の国民についてと国民のための思想), *Bandung: Penerbit Djambatan*, 1981, p. 30.

- (3) 1901年8月, ファン・コール夫人宛のカルティニの手紙。同上書, 91頁参照。
- (4) クスモ, グナワン, マングンクスモという3人の STOVIA (原住民医学校) の学生が設立した民族主義団体である。インドネシアの歴史においては初めて民族の覚醒を生み出す団体である。